

○事業所名	こども発達サポート つむぎ			
○保護者評価実施期間	令和 7 年 11 月 1 日 ~ 令和 7 年 11 月 30 日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数)	16
○従事者評価実施期間	令和 7 年 11 月 1 日 ~ 令和 7 年 12 月 5 日			
○従事者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数)	10
○自己評価表作成日	令和 7 年 12 月 22 日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	室内外の環境を活かし、季節感や変化をつけながら活動プログラムを提供できている。	職員全員でアイデアを出し合うほか、AIやアプリを活用して活動の様子を可視化し、保護者への発信と共有に努めている。	高学年の児童が増えてきたため、児童自身が活動を企画・運営する機会を増やし、自主性を育てるプログラムをつくる。
2	職員間で、LINEグループを構築し、常勤・非常勤を問わず情報共有がスムーズに行われている。	申し送りノートを活用し、勤務時間が異なる職員間でも、その日の児童の様子やヒヤリハットを確実に共有している。	情報共有だけでなく、支援の意図や背景まで深掘りする時間を定期的に確保し、チーム支援の質を高める。
3			

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員の経験年数やバックグラウンドの違いにより、突発的な行動への対応スキルに差が生じることがある。	マニュアル化できない個別のケースに対し、経験則での対応になりがちで、非常勤職員への指導が課題となっている。	外部研修への参加に加え、事業所内で具体的な事例を用いた勉強会（OJT）を増やし、チーム全体での対応力の底上げを図る。
2	地域社会や、学校・学童以外のコミュニティとの交流機会が不足している。	コロナ禍以降、外部との接触を控えていた経緯や、日々の業務に追われ、新規の交流先開拓まで行えていない。	近隣の公民館活動や地域の清掃活動への参加など、小さな一歩から始め、地域住民と顔の見える関係作りを計画的に行う。
3	児童の身体的成長に伴い、活動内容によっては教室内が手狭に感じられる場面がある。	高学年の利用者が増え、活動がダイナミックになっているため、静かに過ごしたい児童との組み合わせが難しくなっている。	建物の拡張は難しいため、小グループごとの活動ローテーション導入や、外の広場の積極利用により、空間密度の分散を図る。